

# IMAD Letter'22



富山新聞創刊100年記念

**「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容**

瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

2023年6月3日(土) - 7月17日(月・祝)

前期:6月3日(土)~6月27日(火)  
 後期:6月29日(木)~7月17日(月・祝)  
 ※大幅な展示替えがあります。



この展覧会では、1930年代の前衛写真から80年代の写真表現への展開を、その理論的支柱となった瀧口修造と実験的な写真表現を実践した3人の芸術家に焦点を当て、そのつながりから生み出された作品や資料を中心に、その魅力を紹介します。さて今日、前衛という言葉はすでに古めかしいイメージを抱く人も多いかもしれません、そもそも芸術における前衛とは、時代に先駆け実験的、革新的な表現を求め、既存の枠を超えるとする最新の動きを意味します。そしてそれを担つたのは、誰もやったことのない表現に挑んだ芸術家達でした。一方、瀧口修造は幼少期から実験精神に目覚め、以後それは彼の基本姿勢として貫かれています。瀧口にとっての実験とは、仮説を検証するようなものではなく、未知なる効果を発見するための実践だったと思われます。それに前衛の精神がマッチしたのでしょうか、彼は幾つの前衛的な芸術運動に関わり支援しました。前衛写真の運動も、その一端だったとい

えますが、それは新しい表現として写真のみならず自由な表現を求めた現代美術にも大きな影響をあたえてきました。日進月歩の技術革新とともにある写真は、映画に発展し、やがて暗室の作業も不要になり、磁気やデジタル技術の導入によりフィルムも不要になり、さらにコンピュータ技術の発達により媒体の一種として仮想現実の表現へと発展していきます。瀧口は、写真におけるシュルレアリズムの功績について「写真の偉大な機能は、人間の映像の機能をも解放する」<sup>\*</sup>と写真の可能性を戦前にすでに論じていました。日本が戦争へと向かい、思想や表現への圧力が強まりつつあった時代に生まれた、今日の映像表現のルーツの1つともいえる「前衛」写真の精神を心ゆくまでご堪能ください。

<sup>\*</sup>「写真と超現実主義」「フォトタイムス」1938年2月号より

## 開催概要

開館時間 9:30-18:00(入館は17:30まで)

休館日 毎週水曜日

会場 富山県美術館2階 展示室2、3、4

主催 富山県美術館、富山新聞社、  
北國新聞社、チューリップテレビ

協賛 塩谷建設、トヨタモビリティ富山(五十音順)

特別協力 武蔵野美術大学 美術館・図書館

企画協力 株式会社アートインプレッション

観覧料 一般900(700)円、大学生450(350)円、高校生以下無料  
 ※( )内は20名以上の団体料金

## イベント情報

会期中のイベントの詳細は、当館ホームページやSNS等でお知らせします。

## 見どころと出品作品



### 表紙 大辻清司《無言歌》1957年 千葉市美術館蔵 後期のみ展示

球形のガスタンクのある空間に黒布に身を包む佐野という女性が現れます。組写真でも1枚完結でもなく、複数のショットを散りばめて干渉し合うように発表された「フォトグラフィック・コンクリート」(造語)のシリーズの1点で、瀧口の命名した「実験工房」のメンバーだった大辻が、北代省三の立ち会いのもと撮影した代表作の1枚です。

### 左ページ 牛腸茂雄《幼年の「時間」1》1980年頃 新潟市美術館蔵 前期のみ展示

牛腸の最後のシリーズの1点です。「こども」でデビューし、遺作も子供の写真となった牛腸にとって、作品にたびたび登場する子供たちは重要な存在でした。ちよこんと座ってこちらを見つめる女の子の姿には、命の輝きが感じられます。モデルは知り合いの写真家・島尾伸三の娘で、現在、漫画家・エッセイストとして活躍中のしまおまほさんです。

### 右ページ下 マン・レイ《イジドール・デュカスの謎》1920年(1968年プリント) 当館蔵

詩人ロートレアモン(本名イジドール・デュカス)の『マルドロールの歌』の一節「ミシンと蝙蝠傘が解剖台の上で出会ったように美しい」から想を得た同名のオブジェの写真で、初期の代表作です。

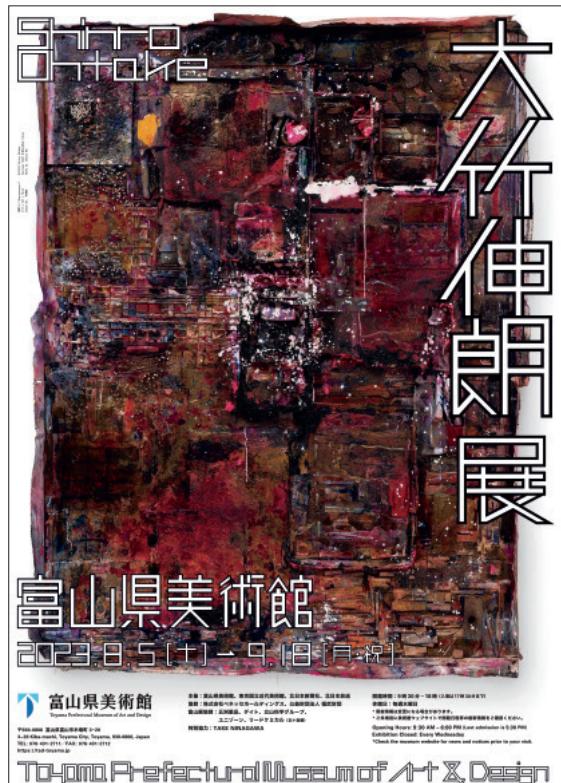
### 右ページ下『海外超現実主義作品集』1937年5月『みづゑ』臨時増刊号表紙

デカルコマニー: 瀧口修造

前衛写真の活動にも大きく関わった瀧口と中山散生(ちるう)が企画した、戦前ヨーロッパの作品や資料を多数展示した展覧会の主要な作品を収録した、雑誌『みづゑ』の臨時増刊号。「アルバム・シュルレアリスト」とも呼ばれ、表紙には瀧口のデカルコマニーが採用されました。同展は、当時の写真家にも大きな影響を与えました。

# 大竹伸朗展

2023年8月5日(土) - 9月18日(月・祝)



ポスター・ビジュアル Design: 小関学 (Edit. 35)

## 開催概要

開館時間 9:30-18:00 (入館は17:30まで)  
 休館日 毎週水曜日  
 会場 富山県美術館2階 展示室2、3、4  
 主催 富山県美術館、東京国立近代美術館  
 協賛 北日本新聞社、北日本放送  
 協賛 株式会社ネッセホールディングス  
 公益財団法人 福武財団

富山展協賛 五洲薬品、ダイト、立山科学グループ、ユニゾーン  
 リードケミカル(五十音順)  
 特別協力 TAKE NINAGAWA  
 観覧料 一般900(700)円、大学生450(350)円  
 高校生以下無料、一般前売り700円  
 ※( )内は20名以上の団体料金

## イベント情報

会期中のイベントの詳細は、当館ホームページやSNS等でお知らせします。



大竹伸朗

1955年東京都生まれ。愛媛県宇和島市在住。主な個展に熊本市現代美術館／水戸芸術館現代美術ギャラリー(2019)、パラソルユニット現代美術財団(2014)、高松市美術館(2013)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(2013)、アートソンジエセンター(2012)、広島市現代美術館／福岡市美術館(2007)、東京都現代美術館(2006)など。また国立国際美術館(2018)、ニューミニアム・オ・コンテンポラリーアート(2016)、バービカンセンター(2016)などの企画展に出展。ハワイトリエンナーレ(2022)、アジア・パシフィックトリエンナーレ(2018)、横浜トリエンナーレ(2014)、ウェネチア・ビエンナーレ(2013)、ドクメンタ(2012)、光州ビエンナーレ(2010)、瀬戸内国際芸術祭(2010.13.16.19.22)など多数の国際展に参加。また「アゲインスト・ネイチャー」(1989)、「キャビネット・オブ・サンズ」(1991)など歴史的に重要な展覧会にも多く参加している。

© Shiro Ohtake, courtesy of Take Ninagawa, Tokyo, photo by Kei Okano

大竹伸朗(1955-)は、1980年代初めに華々しくデビューして以来、絵画、版画、素描、彫刻、映像、絵本、音、エッセイ、インスタレーション、巨大な建造物に至るまで、猛々しい創作意欲でおびただしい数の仕事を手掛け、トップランナーであり続けてきました。近年ではドクメンタ(2012・ドイツ)とヴェネチア・ビエンナーレ(2013・イタリア)の二大国際展に参加するなど、現代日本を代表するアーティストとして海外でも評価を得ています。

2006年に開催された「全景 1955-2006」以来の大規模な回顧展となる本展では、国際展に出品した作品や、当館の所蔵する《男》(1974-1975年 165×63×53cm ミクストメディア)、《サンティアーゴ》(1985年 190×370cm ミクストメディア)を含むおよそ500点を7つのテーマ「自／他」「記憶」「時間」「移行」「夢／網膜」「層」「音」に基づいて構成します。作者が「既にそこにあるもの」と呼ぶテーマのもとに半世紀近く持続してきた大竹の制作の軌跡を辿るとともに、時代順にこだわることなく作品世界に没入できる展示によって、走り続ける強烈な個性の脳内をめぐるような機会となるでしょう。

## 見どころと出品作品



左上 《宇和島駅》1997年 各190×90×180cm Photo: 岡野圭

右上 《スクラップブック #71／宇和島》2018-21年 33×85.5×40.4cm 574ページ／17kg Photo: 岡野圭

左下 《モンシェリー:スクラップ小屋としての自画像》2012年 Commissioned by dOCUMENTA(13) Photo: 山本真人

中下 《ダブ平&ニューシャネル》1999年 公益財団法人福武財団／右下 《男》1974-75年 165×83×53cm 当館蔵 Photo: 柳原良平

## POINT

### およそ500点の圧倒的なボリュームと密度

最初期の作品から近年の海外発表作、そしてコロナ禍に制作された最新作まで、およそ500点の作品が一堂に会します。見どころは、2012年の『ドクメンタ』で展示した『モンシェリー:スクラップ小屋としての自画像』(2012年)。

この大作を中心に、年代順の展示ではなく、「自／他」「記憶」「時間」「移行」「夢／網膜」「唇」「音」という7つのテーマがゆるやかにつながりながら会場は構成され、大竹の多彩でエネルギー満ちた世界に浸ることができます。

### 富山県美術館屋上で《宇和島駅》を展示します。

かつてJR宇和島駅で使用されていたサインが駅のリニューアルのため廃棄されると聞き、これを譲り受けた大竹伸朗が、赤いネオン管を入れて作品化した《宇和島駅》(1997年)。

これまで東京国立近代美術館(東京都)など数々の個展会場に設置され、話題になった作品で、

富山県内では今回が初めての展示となります。大竹伸朗展の最終日の9月18日まで展示し、夜間は赤く点灯します。

### 本展のために製作されたグッズも多数登場

作家本人が監修した、オリジナルグッズも充実しています。

スナックの看板をモチーフにした代表作《ニューシャネル》(1998年)の絵柄のTシャツをはじめ、

「大竹伸朗 スクラップブック 見開道100」など、おすすめ品がずらりと揃います。

また、折本7部(新聞フォーマット、B全シート、パノラマシート)、冊子1部の計8点と表紙から成る本展図録は、

「印刷物への挑戦」といえる多種の印刷技法を用い、大竹の創作世界を紹介しています。

## 「生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ」関連イベント



「スペシャルトーク 石井頼子×原田マハ」の様子

「生誕120年 棟方志功展」会期中、トークイベントや上映会、福光との連携スタンプラリーなどを実施しました。

開幕初日には、石井頼子氏（棟方志功の初孫で、本展学術協力）と原田マハ氏（小説家）によるスペシャルトークを開催。展覧会出品作品や棟方志功について、様々な背景やエピソードを想像も交えてお話しいただき、笑いも起る和やかで熱気あふれるトークとなりました。

そのほか、棟方志功が疎開した富山県南砺市福光の棟方関連施設と連携し、相互に訪ねていただけるようスタンプラリーを行うなど、他地域との繋がりを強めた企画も行いました。



オープンラボの様子

### ▼ スペシャルトーク 石井頼子×原田マハ

3/19(日) 13:30~15:00

### ▼ 棟方志功展ギャラリートーク

3/24(金)、4/7(金)、4/21(金)、5/12(金) 各日14:00~

### ▼ 『彫る 棟方志功の世界』上映会＋アフタートーク

4/23(日) 14:00~15:30 講師: 石井頼子氏

### ▼ 棟方志功展関連オープンラボ

【私たちの柵綴り RE;メイキング・オブ・ムナカタ】

3/18(土)~5/23(火) 各日10:00~12:00、14:00~16:00

### ▼ 福光連携スタンプラリー

3/18(土)~5/21(日)

実施施設:南砺市福光美術館、棟方志功記念館 愛染苑  
躑躅ヶ崎館、富山県美術館

## 2023年度展覧会スケジュール

- ▶ 「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容  
一瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄 2023年6月3日(土)ー7月17日(月・祝)
- ▶ 大竹伸朗展 2023年8月5日(土)ー9月18日(月・祝)
- ▶ 金曜ロードショーとジブリ展 2023年10月7日(土)ー2024年1月28日(日)
- ▶ 倉俣史朗のデザインー記憶のなかの小宇宙 2024年2月17日(土)ー4月7日(日)

## 2022年度新収蔵品紹介!

2022年度は、美術品の購入と受贈により作品を取得しました。

これらの作品は、コレクション展や当館で開催する各種企画展で活用します。

### 美術品の購入(計6件)

	作家名	生没年	作品名
1	五島 健三 ごとう けんぞう	1888~1946	板絵・スケッチ式(板絵1点、スケッチ10点)
2	杉戸 洋 すぎと ひろし	1970~	the pedals
3	関根 直子 せきね なおこ	1977~	Mirror Drawing – Inner Color
4	田村 友一郎 たむら ゆういちろう	1977~	十戒
5	蜷川 実花 にがわみか	1972~	花、瞬く光
6	蜷川 実花	〃	〃

上記2~6は、富山県内在住の方からのご寄附を活用して購入。寄附者の意向を踏まえ、日本の若手・中堅作家(30~50代)の作品から選出。

### 美術品の受贈(計7件)

	作家名	生没年	作品名	寄附者
1	木下 晋 きのした すすむ	1947~	ある運命	瀧花 喜代司 氏
2	木下 晋	〃	√3=ナルシス	〃
3	木下 晋	〃	102年の闘争Ⅲ	〃
4	木下 晋	〃	103年の闘争Ⅱ	〃
5	杉戸 洋 すぎと ひろし	1970~	Thunder bird	杉戸 洋 氏
6	田村 友一郎 たむら ゆういちろう	1977~	瀧壺	田村 友一郎 氏
7	蜷川 実花 にがわみか	1972~	Self-image	蜷川 実花 氏

※作家名五十音順

## 《YU-84》吾妻兼治郎

1987年 ブロンズ 200×114×64cm



撮影: 小杉善和

三角形の形態が天へ向かってそびえたつような印象を与える本作品は、縦長の板を並べて四角形にし、それを二つ折りにして張り合わせた辺を、上から下にいくにつれて開いたように見え、その形状は戦国時代の兜にも似る。ところどころ欠けたような外周は、なめらかとはほど遠い。本体部分には、隙間のごとく縦横に走る溝が散見され、左面上方にはすり切れた金貨のような小円板や、ひび割れた球体が張り付けられている。「YU」、すなわち「有」シリーズの84番目と名付けられた本作品は、その壊れて擦り切れたような見た目から、歴戦の武士にも通ずる潔い美しさを感じさせる。

作者の吾妻兼治郎は、東京芸術大学で学んだのち、1956年9月、イタリア政府給費留学生としてミラノに渡り、マリノ・マリーニに師事した。当初はマリーニ風の作品を制作していた吾妻は、やがて自分の作品を見るのも嫌になり、すべてを物置にしまい、ガランとしたアトリエで数か月悩み続ける。その果てに、偶然、アトリエで果物の木箱が崩れてできたリズミカルな美しさを目にして、衝撃を受ける。そして、その美しさを石膏にするためにバケツの石膏を木片にかけ、固まつた石膏から木片をはずしてできたレリーフに「無」という題を

つけた。「なんにもないアトリエの中でなんにも入っていない頭の中から生まれたので、何の気もなく、ただ無をつけた」のだという（西武美術館編「吾妻兼治郎による“AZUMA”」「吾妻兼治郎展」図録、富山県立近代美術館ほか、1988年、106頁）。「MU」シリーズは、禅の思想と結びつけられ、東洋的なものの現れとして、西洋で高い評価を受けるようになるが、それは一方で、作品の成り立ちを考えると、作家本人にとっては思わぬことだったかもしれない。

「MU」シリーズを作り続けて25年ほど経た1985年頃から、吾妻は「YU」シリーズに取り組み始める。ただ、本人も語るように、「YU」と「MU」の作品スタイルの間に際立った違いはない。有と無は、いわば表裏一体であることに気がついたからだという。

本作品は、移転前の近代美術館時代同様、師マリノ・マリーニの彫刻作品の近くに設置されている。美術館をそぞろ歩き、本作品に出会ったなら、吾妻の追求した形態の美しさにぜひ思いをはせていただきたい。

(学芸課学芸員 江尻 育世)